

繪本の
与えかた





目次

- 4 絵本は、子どもが生まれてはじめてであう本です
- 6 本好きの子どもに育てるには
- 8 絵本は、おとなが子どもに読んであげる本です
- 12 赤ちゃんの絵本
- 18 二歳・三歳児の絵本
- 21 四歳児の絵本
- 22 成人式を終えた絵本
- 25 五歳・六歳児の絵本
- 27 科学の絵本、知識の絵本
- 30 おしまいに——私たちはこの子の親なのです



編集者 松居直の思い

この「絵本の与えかた」のもとになった文章は、一九六二年に書かれました。筆者は、一九五六年に月刊絵本「こどものとも」を創刊した編集者・松居直（一九二六―二〇二二）です。

この文章が書かれた当時、日本は高度経済成長期の只中にありました。家事や子育ては女性が担い、収入を得る仕事は男性が主に担うという、現在よりも性別による役割分担が強く意識されていた時代です。そのような社会状況を背景に書かれているため、現代の感覚で読むと、たとえば母という存在が強調されていることに、違和感を覚える方がいらつしやるかもしれません。今ではあまり用いられない言葉づかひもあり、耳慣れない部分もあると思います。

その一方で、絵本の編集者として、そして一人の父としての実感から語られる、幼い子どもと絵本との豊かな関係

性は、今も変わらず大切なものだ」と私たちは考えています。松居は、同じく編集を手がけた雑誌「母の友」において、「母」という存在に光をあてながら、その「友」となる人々——父親や祖父母、幼稚園・保育園の先生、近所の方々、友人など、幼い子どもに関わる「すべての人」に向けて言葉をお届けようとしていました。

この「絵本の与えかた」の言葉も、「すべての人」に向けたものとして受け止めていただけたら幸いです。

子どもと、子どものそばにいる皆さまが、絵本をきっかけに「すばらしい時間を過ごされることを心から願ひ、この「絵本の与えかた」をお届けします。

（福音館書店「絵本の与えかた」編集室）
 まついただし●一九二六―二〇二三年。京都に生まれる。同志社大学卒業後、金沢の福音館書店に入社。絵本の出版・編集に従事し、一九五三年に「母の友」、一九五六年に「こどものとも」を創刊。多くの絵本作家を発掘し、世界に日本の絵本を広めた。『だいくとおにろく』『ひかくんめをまわす』以上、福音館書店などの絵本をはじめ、『絵本とは何か』日本エディターズクラブ出版部、『わたしの絵本論』（国士社）、国語教科書『ほろこ』（福音館書店）など著作多数。

絵本の与えかた 小学校にはいるまで

絵本は、子どもが生まれてはじめてであう本です

幼児をお持ちのお母さんは、どんなにきゆうくつな家計の中からも、せめて幾冊かの絵本を、子どもに買ってやりたいとお思いになるでしょう。

なぜ、絵本は幼児の成長に必要なのでしょうか。絵本がなくても子どもは育ちます。それでも幼児に絵本が大切だというには、それなりの理由があるはずで

満一歳ごろから絵本を読んでやりました

まったく私的な体験で恐縮なのですが、私が一人の父親として絵本に強く興味を持ったのは、長男が生まれたときのことです。生まれたての赤ん坊というのは、なりたての若い父親にとっては手も足もでない感じで、のぞきみしているだけのようなものです。もっぱら子育ての主役は母親です。そのときの母親の風情は、何ともねたましいくらいしあわせそうで、誇らしげで、自信にあふれています。ああした頼りがいのある、温か



い母親という存在が支えているからこそ、赤ん坊は安心して生きていくのでしよう。ところが若い父親は手持ち無沙汰です。いろいろと手助けをするにしても脇役です。ようやく子どもが満一歳ごろになったとき、私自身は子どもに絵本を読んでやることを思いつきました。本好きの私には、これは楽しい仕事でした。ひざに抱きあげて絵本を読んでやったり、布団の上になころがって読んでやったりしていますと、わかっているのかいないのか、熱心に見ていました。そして、こんな幼い子が意外に強い興味を、絵本に対して示すことを発見しました。

いそがしくても絵本は読めます

私はひと倍いそがしい仕事をかかえていたのですが、こうした絵本を読む時間というのは、その気持ちさえあれば、だれにでもいくらでも見つかるものです。一冊の絵本は五分から十分もあれば読み終えられるのですから。そしてそのひとときは、親と子の気持ちがとても自然に寄りそい、通い合います。こうして私は父親としての気持ちを十分に満足させられ、子どももそれをとても楽しみにしていました。子どもたちが成人した今も、そのときのいろいろの思い出は、親にも子どもにも、心の中にはつきりと残っています。それが人間の絆きずなというものかもしれない。もちろん母親も絵本を読んでやっていました。私たち夫婦は、子どもに食べものを与





えるのとまったく同じ感覚で、子どもに絵本を読んでやりました。それは特別なことではなく、生活の中に本があることがごく自然だったからです。こうして子どもたちへの本読みは、十年間以上も続きました。しかし子ども自身に早くから絵本を読ませるようには、決して指導しませんでした。

『本好きの子どもに育てるには』

お母さんはどなたも、わが子が、本好きで、読書力のある子どもに育って欲しいと願っていらつしやるでしょう。しかし、現実には、必ずしも親の願いどおりにはなりません。どこでどうすれちがうのでしょうか。

『子どもはかくれてでも本を読むものです』

子どもを本好きにすること——これは決してむずかしい問題ではありません。子どもは元来欲張りで、自分中心で、自分にとっておもしろいことなら、おとなからとやかく言われなくてもやりますし、楽しいと感ずることなら、おとなが禁止しても、隠れてでもやります。ですから、本を読むことがおもしろくてたまらない、楽しくて仕方がない、と思いついでいる子どもは、「本を読みなさい」と言われたり、特に読書指導などをされなくても、勝手にどんどん本を読みます。「いいかげんに本なんか読



むのをやめろ」と言っても、親に気づかれぬように読書が続けています。

『早くから字を教えても、本好きにはなりません』

つまり幼児期から、本というものは何ておもしろいんだろう、ということ、身にしみて体験しなければ、本好きの子どもにはなりません。そのためには、『本』で子どもを苦しめたり、早くから字を教えて、絵本を無理に読ませたりはしないことです。

近頃は、幼児期から家庭でアイウエオを教え、絵本を早くからひとりで読めるようになる傾向がありますが、本嫌いにするのに、あれほど有効な方法はありません。絵本でつらい目にあつたり、苦しめられたりした子どもは、絵本好きにも、読書好きにも育ちません。

『絵本は幼児に読ませる本ではありません』

それよりも、その子の好きな絵本を、繰り返し繰り返し親が子どもに読んでやることです。お母さんやお父さんが絵本を読んでもくれること、そのことが幼児にはうれしいのです。その上、その絵本が自分のお気に入りの絵本であれば、こんな楽しいことはありません。この『楽しさ』は、必ず子どもの心に深く残ります。おとなは忘れてしまっても、この喜びは、子どもの成長とともに育ち、それが、本への興味にもなっています。絵本は、幼児に読ませる本ではなく、おとなが読んであげる本です。そして、絵本は、子どもに苦痛を与えるものではなく、喜びと楽しみを味わわせるものです。それ



ゆえ絵本は、役に立ったり、ためになったりするものとは考えないでいただきたいし、まして教科書がわりにするものではありません。

お母さんは一冊の絵本を手にとれるとき、この一冊の絵本が、わが子にどのくらい多くの喜びと楽しみを与えることができるかを、まず考えてみてください。それが、お子さんが読書力のある、本好きな子どもに育つ確かな道です。

幼児期に、より多くの喜びと楽しみ、言い換えればしあわせを、親から与えられた子どもは、成長したとき、みずからのしあわせをしつかりと築きあげ、そして人とそれを分かちあえる人間に育つのだと思います。そのためにも、お母さんがしあわせであり、お父さんがしあわせであってくださいることを、心から祈らずにはいられません。

絵本は、おとなが子どもに読んであげる本です

次に絵本と幼児の関係で、ぜひとも知っておいていただきたいことは、ことばの問題です。

すでに申しましたように、幼児にとつて、絵本は自分で読むための本ではありません。おとな——母親、父親、保育者、図書館員など——に読んでもらって、「耳で聞く本」です。絵本は、子どもに読ませる本ではなく、おとなが子どもに読んであげる本「だ」と



いうことが、絵本を考えるときの大前提です。また、おとなが読んでやるからこそ、絵本は幼児の成長にかけがえのない、大切なかわりを持ち、重要な役割を果たすのです。
子どもに「ことば」を教えるのは、家庭においてです

子どもに絵本を読んでやるのは、まずお母さんか保育者ということになるでしょう。本当はお父さんも大切なのです。父親と母親が読み手の第一に位置すべきです。

子どもはお父さんやお母さんが語りかけることばを「耳」で聞いて、ことばを覚え、まして小学校の先生ではありません。まず第一にお母さん、そしてお父さんです。赤ちゃんが生まれた瞬間から、お母さんは無意識に赤ちゃんに話しかけます。そして、

その後の日常生活の中で、お母さんやお父さんが、あやしたり、しゃべりかけたり、ほめたり、しかったり、ひとりごとを言ったりするあの数々のことばを聞いて、赤ちゃんは人間としてのことばを習得していくのです。そして、語り手のことばといっしょに、人間の豊かな喜怒哀楽の「感情」や「心」を体得して、人間らしい心を育てていくのです。要するに子どもは、親から自分のことばを受け継ぐものなのです。お父さんやお母さんが心のこもった豊かなことばで語りかけてこそ、子どもは豊かなことばと心を身につけることができるのです。それでは、お母さん、あなたは、人間としてどんなに豊かなこと



ばを、自分のものとして持つていらつしやいますか。ご自分の中に、すばらしいことばの世界をお持ちですか。

絵本は豊かなことばの宝庫です

さあ、こうなると、私たちは自信たっぷりとはまいません。そんなむずかしいことは、とてもとても……という気になります。ところが、みなさんのすぐ身近に、宝物のような、美しい、楽しい、豊かな想像力を育ててくれることばの一杯つまった世界があります。それが絵本です。

絵本の中には、詩人や作家や科学者が、選び抜き、工夫を重ね、考え抜き、心をこめたことばで書かれた詩や物語や知識の世界がつまっています。しかも一冊一冊、作者もテーマもちがっているわけですから、それこそ種々様々のことばの世界が語られています。絵本には、すばらしい絵があるとともに、すばらしいことばがあるので。

お母さんが子どもに絵本を読んでもあげるといことは、このすばらしいことばが、お母さんの声で、お母さんの口から語られるということです。それを聞いている子どもにとっては、絵本の中のすてきなことばの世界は、お母さんの声で、お母さんのことばとして、耳に聞こえてきますし、お母さんが語ってくれた話として伝わります。その意味で、絵本は作者のものというよりは、絵本は読み手のものなのです。

絵本は親と子をつなぐ心の広場です

こうして私たちは、すばらしいことばを、自分の声で、自分のものとして、子どもに語ってやることができます。そのとき、語り手のお母さんの気持ちも、不思議と聞き手の子どもに伝わります。読み手が共感し、感動していれば、その読み手——お母さんの感動はみごとに子どもの気持ちに反映します。

そして、おとなであるお母さんと、はるかに幼い子どもとは、読み手と聞き手という立場のちがいはありますが、心をしつかり通わせ合いながら、絵本の世界を旅し、通り抜け、共通の楽しい体験をします。こういう形でのおとなと幼児の精神的な共通体験は、本当に深く心に残り刻み込まれます。こうした共通のことばと絵本体験を持っている親と子は、成長してもどこかに通い合える、目に見えない絆を持つています。このことが現代の家庭に、もつとも欠けていることです。少年少女のいろいろなトラブルの根は、この心の絆のないところに起きていると思います。

教育を受けるに必要な力は、家庭で、絵本を通して養われます

絵本をめぐる親と子の温かい人間関係、そして絵本を通して語られる親の心のこもったすばらしいことば、この二つが、子どもが、保育や学校教育を受けるときの基盤となります。なぜなら、教育というものは人間関係





『まるくて
おいしいよ』
小西 英子 作

うになりす。ほとんどの赤ちゃんが一番最初に関心を示す絵本に『くだもの』があります。果物を描いた絵本は他にもたくさんありますが、何故この絵本がそれほど子どもたちをとらえるのか、子どもたちに読み聞かせてその様子を見ていて分かりました。スイカやリンゴなどまるごと描いたページを繰ると、それぞれの果物が切り分けられていたり、皮がむかれていたりして「さあ どうぞ」という一言がそえられています。この一言に



『まるくて おいしいよ』より



『くだもの』
『いちご』
平山 和子 作

とことばで成り立っているものです。それも子どもの側に、先生や友達と豊かな人間関係が持てる力があることが大切ですし、先生の語られることばを、しっかりと耳を傾けて聞く力が、子どもになれば教師は手も足も出ません。子どもがこの二つの力を身につけるのは、家庭においてですし、それを育てることのできる人は、お母さんとお父さんです。教育の基盤は何といても家庭にあります。そして、絵本を読んでもあげるといふことは、まさにそのことに直結しています。

赤ちゃんの絵本

さまざまなもの絵本

子どもたちの心を豊かに育てるためには、肌の触れ合いと同じように、お母さんやお父さんからの心のこもった語りかけが欠かせません。いつの時代も、お母さんやお父さんは赤ちゃんのときから、心をこめて「子守り歌」を歌ってあげたり「あやし言葉」な

どを口にして子どもたちを育ててきました。子どもたちは、そうしたたくさんのお母さんやお父さんからの言葉を育ててきました。ところが最近では、赤ちゃんが家庭のなかで伝統的な「子守り歌」や「あやし言葉」などの言葉の面白さに接することが少なくなっているようです。ですから最近では、子どもたちの言葉の体験の幅は狭くなってきているといってもいいでしょう。それだけに、子どもたちの言葉の世界を広げるといふ意味でも、絵本の役割は大きくなってきています。

それでは、赤ちゃんはいつごろから絵本を楽しめるようになるのでしょうか？ 赤ちゃんは一人一人発育の仕方や、育っていく家庭の環境の差はありますが、生後十カ月を過ぎるようになると、お母さんやお父さんの言葉を聞きながら絵本の世界に入っていけるようになります。



『くだもの』より



『ぶーぶー じどうしゃ』
『ずかん・じどうしゃ』
山本 忠敬 作



『どうぶつのおかあさん』
『どうぶつのこどもたち』
小森 厚文
数内 正幸 絵

子どもたちは、いいないない、ばあ〴〵のように、隠されていたものが目の前に飛び出てくる遊びが大好きで、何度繰り返しても飽きることがありません。『でてこい でてこい』は、緑や青の色紙に「だれか かかれてるよ でてこい でてこい」と呼びかけて、ページを開けると「げこげこげこ」とカエルが飛び出してきたり、「があ があ があ があ」とアヒルが飛び出していきます。子どもたちは「でてこい でてこい」と繰り返

遊びを楽しむ絵本

じつと見入っています。そして、次のページ「あー おきた！」で子どもたちはなんとも嬉しそうな顔をします。ページを繰るたびに子どもたちは同じ反応をし、なかには、寝ている動物たちの絵を手のひらでとんとんと軽くたたきながら「ねんね、ねんね」と声をかける子もいます。きつと、いつも自分がしてもらっていることを寝ている動物にしてあげているのでしょうか。『もう おきるかな?』や『どうぶつのおかあさん』『どうぶつのこどもたち』は本物の動物の生活のようすを描いている絵本です。ぬいぐるみの絵では、こうした絵本が伝えたいことは的確には伝わりません。

乗物の絵本の『ぶーぶー じどうしゃ』や『ずかん・じどうしゃ』もおもちゃではなく、いつも目に見える本物と同じ自動車がいねいに描かれているからこそ子どもたちは目を輝かせて見入っているのです。



『でてこい でてこい』
はやし あきこ 作



『もう おきるかな?』
まつの まさこ 文
やぶうち まさゆき 絵



子どもたちをとらえる秘密があったのです。ただ果物の名前が並べられているだけでなく、「さあ どうぞ」と呼びかけられることで、子どもたちはここに描かれた果物が自分に向けて「食べてごらん、おいしいよ」と差し出されているのを強く感じるのです。赤ちゃんや毎日生活のなかで、お母さんやお父さんから食事のとき、寝るとき、起きたとき、いつでも呼びかけるようにして話しかけられています。ですから「くだもの」「さあ どうぞ」という呼びかけは、赤ちゃんを絵本の世界に案内する重要な言葉だったのです。そして、もう一つこの絵本の魅力は絵にあります。子どもたちは絵本を見ながら果物のおいしさを、たつぷりと目で味わうのです。『くだもの』に描かれた果物は写実的で本当においしそうですし、本物よりもおいしそうに描かれています。リングゴやナシのページでは、ちゃんと子どもたちが指先でつまめるようにフォークの持つ部分や子どもたちの方に向けて描かれています。この絵本を読んでもらったほとんどの子どもたちが、描かれた果物に手を伸ばすのに納得がいきます。『いちご』や『まるく ておいしいよ』も子どもたちが食べる楽しさを味わえる絵本です。

動物の絵本で『もう おきるかな?』は、子どもたちの日常である「ねんね」と「おつき」を描いたものです。子どもたちに「ねこねこよくねているね。もう おきるかな?」と呼びかけるような文章を読んでもらえると、子どもたちは親子の猫の寝ているようすに



『かさ
さしてあげるね』
はせがわ せつこ 文
にしまさ かやこ 絵



『ごぶごぶ
ごぼごぼ』
駒形 克己 作



『きんぎょが
にげた』
五味 太郎 作



『たまごの
あかちゃん』
かんざわ としこ 文
やぎゆう
げんいちろう 絵

二歳くらいまでの子どもたちが楽しめる絵本は、言葉との関係が大きいのです。子どもたちにさそいかけられるような呼びかけや繰り返しの言葉、リズムや動きがあり響きのよい言葉に強くひきつけられます。言葉に強い関心をもち言葉を獲得していこうとするこの年齢の子どもたちへの「言葉」とは、子どもたちに媚びるような甘い言葉や、反対にこれでもかというような刺激的な言葉ではないはず。言葉を楽しむ上質な感覚

言葉を聞く楽しさから物語絵本へ

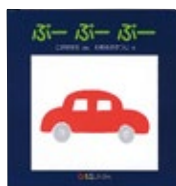
点にたどりつくまでが「ころころころ」という言葉で描かれていきます。響きがよくリズムのある言葉が耳に心地よいことと、色玉の動きのある絵が子どもたちを捉えます。『ごぶごぶ ごぼごぼ』は、水の玉が動いていくような擬態語に合わせて、色の玉が小さくなったり大きくなったりし、子どもたちの目と耳を楽しませていきます。『かさ さしてあげるね』は、雨の本です。ゾウに降る雨は「ピッチャン パッチャン」、キリンに降る雨は「ピロリン ポロリン」、アリに降る雨は「ピピ ポピ ピピ」と、動物や虫によって聞こえてくる雨の音が違うよと、作者は子どもたちに語りかけていきます。この他にも、言葉の響きやリズムを楽しむ絵本には『ぶーぶーぶー』や『がちやがちや どんどん』『まる まる』があります。こうした絵本に出会うことで、子どもたちの言葉の世界はより広がっていくのです。



『まる まる』
中辻 悦子 作



『がちやがちや どんどん』
元永 定正 作



『ぶーぶーぶー』
こかぜ さち 文
わきさか かつじ 絵



『ころころころ』
元永 定正 作



音の響きを楽しむ

子どもたちは大人が聞き過ぎてしまふような、雨の音、風の音など自然の中の音に聞き耳をたてていたり、言葉の持つ心地よい響きやリズムに強い関心を持ち、それを楽しむ柔らかい耳をもっています。『ころころころ』は、赤、青、緑、白の小さな玉が階段道を上がり、赤い道やでこぼこ道をころがり、嵐の道で吹き飛ばされながらも最終

返すたびに、一体何が飛び出してくるのかと期待に目を輝かせています。『たまごのあかちゃん』は、卵が描かれたページで、卵にむかって「たまごのなかに かくれているあかちゃん は、だあれ でおいでよ」と呼びかけ、次のページを開けるとニワトリの赤ちゃん、蛇の赤ちゃん、恐竜の赤ちゃんが登場します。リズム感のある、繰り返しの言葉と、びっくり箱を開けるような楽しさが子どもたちの心をひきつけるのです。二歳近くになった子どもたちには、絵の中に隠れている金魚をさがす、かくれんぼの絵本『きんぎょが にげた』が、絵さがしを楽しみながら絵本の世界へと案内していきます。



『おやすみなさいのほん』
マーガレット・ワイルズ・ブラウン 文
ジャン・シャロー 絵
いしい ももこ 訳



『かばくん』
岸田 裕子 作
中谷 千代子 絵



『おつきさまこんばんは』
林 明子 作



『たんたんぼうや』
かんざわ としこ 文
やぎゆう 絵
げんいちろう 絵

よりも絵本の与えかたとして最良の方法です。

返し。こうした昔話の、いつけん退屈でわずらわしく思われる繰り返しが、この年齢の子どもにはたいへん魅力的です。そして同じ絵本を、繰り返し読んであげることが、何よりも絵本の与えかたとして最良の方法です。

『三びきのやぎのらがらどん』の力強い繰り返しの問答と、思いもかけぬやぎの逆転大勝利で終わるドラマ。手袋の中に動物が七匹も入る『てぶくろ』の不思議さと、繰り返しの繰り返しが、この年齢の子どもにはたいへん魅力的です。そして同じ絵本を、繰り返し読んであげることが、何よりも絵本の与えかたとして最良の方法です。

繰り返しが大切な昔話絵本

三歳になりますと、急にことばに対する力が発達します。簡単な筋を追って物語を理解することができ、その力はおとなの働きかけしだいで、目ざましく育っていきます。三歳は絵本体験の革命期と申せましょう。この時期にもっともふさわしい絵本が、まず昔話絵本の中にみつかります。『おおきなかぶ』、そして『三びきのやぎのらがらどん』、『てぶくろ』。この三冊は絵本の中の絵本とでもいえるくらいに人気があります。

ナーズブックとしてひじょうに高い評価を受けている日本の幼児絵本です。

『いやだいやだの絵本』『あーんあんの絵本』は、少しちがった視点から、同じ年頃の子どものために準備された、定評のある絵本です。この年齢の子どもには、『かばくん』

『おやすみなさいのほん』のような詩の絵本も大切です。

二歳・三歳児の絵本 子どもの日常生活に添った絵本

二歳、三歳児になりますと、日常生活体験が少しずつ積み重なってきます。ことばもつぎつぎと自分のものになり、自分から表現することに興味を覚えます。『どうすればいいのかな?』の『くまくん』のシリーズや『みんなうんち』(P.29)は、そのころの子どもたちに最適です。『くまくん』のシリーズは欧米各国語にも翻訳され、ビギ

を持つ作家が、本気になって子どもたちに語りかける言葉でなければいけません。絵についてと同じことです。子どもたちが言葉を身につけるには、言葉を具体的なイメージで心に描くことができなければいけません。それには、作品の世界の言葉を的確に表現した絵に接することが大切です。言葉を初めとしてあらゆる感性の基礎は、この時期に作られるといっても過言ではないのです。

子どもたちは絵本の楽しさを、大好きなお母さんやお父さんを通してたつぷり味わうことで言葉を聞く喜びを知っていきます。そして、こうした言葉を聞く楽しさや喜びを繰り返して味わうことで、『たんたんぼうや』や『おつきさまこんばんは』などの物語の絵本を楽しむように育っていくのです。



『てぶくろ』ウクライナ民話
エウゲニー・M・ラチョフ 絵
うちだりさこ 訳



『三びきのやぎのらがらどん』
ノルウェーの昔話
マーシャ・ブラウン 絵
せたていじ 訳



『おおきなかぶ』
ロシアの昔話
A・トルストイ 再話
内田 莉沙子 訳
佐藤 忠良 画



『あーんあんの絵本』
せな けいこ 作・絵



『いやだいやだの絵本』
せな けいこ 作・絵



『どうすればいいのかな?』
わたなべ しげお 文
おおとも やすお 絵



『もりのなか』
マリー・ホール・
エツ 文・絵
まさき りこ 訳



『いたずら
きかんしゃ
ちゅうちゅう』
バージニア・リー・
バートン 文・絵
むらおか はなこ 訳



『ちいさなねこ』
石井 桃子 作
横内 襄 絵



『はなをくんくん』
ルース・クラウス 文
マーク・シーモント 絵
きまはじめ 訳

良い絵本の秘密は何でしょう

創作の物語絵本では、『はなをくんくん』『ちいさなねこ』『たろうのともだち』『ぞうくんのさんぼ』そして『ぐりとぐら』などから与えていくのが適当でしょう。絵と文が本当にうまくつけ合っていないと、子どもは安心して絵本の中へ入っていきません。子どもにとって、絵本は外側からながめているものではなく、自分がその絵本の中の人物になったような気持ちで、絵本の物語の世界へ入り込むものです。それには、耳から聞こえてくる物語のことはやリズムと、目で見えるさし絵の描き方や場面の進み方が、ぴつたり一致していませんと、物語の世界へは入れません。

絵がきれいだとか、絵がかわいいとか、文章が少ないといったことは、選択の基準とまったく関係がありません。色彩豊かで、明るい絵の絵本を、子どもが喜ぶという見方もあります。確かに、はじめは子どもの眼をひきますが、そんな表面的なことで、子どもは満足しません。子どもの眼はおとなよりはるかに鋭く、厳しいものです。

見た目のきれいさでは、決められません

たとえば、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』や『もりのなか』のさし絵は、黒一色ですが、圧倒的に人気があります。『どろんこハリー』も地味な三色で描かれていますのに、驚くほど幼児の支持を得ているのはどうしてでしょうか。それは物語の進め

方のうまさと、それに合ったさし絵がすみずみまで実にうまくつけあつて、物語をよく語っているからです。

絵が物語を語るということでは、この『どろんこハリー』や『はなをくんくん』『てぶくろ』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』をざらんくだされれば、よくわかりになるでしょう。文を読まなくても、絵を見ただけで、話の筋が不思議なくらいよく読みとれます。それに、優れた画家は絵の部分部分のこまかいところに、細心の注意を払って、文章には書きあらわされていない物語の、いろいろな部分をも、絵で語って子どもの期待にこたえます。『とこちゃんはどこ』がそのよい例です。

四歳児の絵本

四歳ころになると、子どもの好みも少しずつはつきりしてきて、選択がむずかしくなります。この時期は、何といたっても『物語絵本』が主役です。そして、絵本の選び方がとても大切になります。

昔話絵本では、『おおかみと七ひきのこやぎ』『うぶきのくま』『三ひきのこぶた』『ももたろう』など、創作物語の絵本では、『はじめてのおつかい』『こすずめのぼうけん』『いたずらこねこ』『アンガスとあひる』『ティッチ』などからおすすしめします。



『おおかみと七ひきのこやぎ』
グリム童話 グリム 作
フェリクス・ホフマン 絵
せたいじ 訳



『とこちゃんはどこ』
松岡 享子 作
加古 里子 絵



『どろんこハリー』
ジーン・ジョン 文
マーガレット・プロビー・
グレアム 絵
わたなべしげお 訳



『ぐりとぐら』
なかがわ りえこ 作
おむら ゆりこ 絵



『ぞうくんのさんぼ』
なかの ひろたか 作・絵
なかの まさたか レタリング



『たろうのともだち』
村山 桂子 作
堀内 誠一 絵



『アンガスとあひる』
マージーリー・ブラック 作・絵
瀬田 貞二 訳



『いたずらこねこ』
バーナディン・クック 文
レミイ・シャーリップ 絵
まさき るりこ 訳



『三びきのこぶた』
イギリスの昔話
瀬田 貞二 訳
山田 三郎 画



『三びきのくま』
トルストイ 文
バスネツォフ 絵
おがさわら とよき 訳

名作絵本は避けましょう

このうち昔話絵本は、同じ物語の絵本が数多く出版されていますので、実は選択がもつともむずかしい部門です。『三びきのこぶた』にしても『ももたろう』にしても二十種類ぐらいあるでしょう。私どもは研究を重ねて、昔話としてもっともふさわしい物語の形のものを選び、翻訳文も、日本語として最良の訳文を厳選していますが、お母さんがせっかくな購入されるのなら、一度、専門家の意見を聞いてから判断されるのもよいと思います。その相談相手には、図書館員、家庭文庫の方、そして、幼稚園、保育園の先生方がよいでしょう。いきなり書店で絵本を選ぶというのは、とてもむずかしいものです。というのは、良い昔話絵本と、そうでない絵本の間には大きな差があり、中には、物語がすっかり変えられてしまっているものさえあるからです。ごく一般的な見方ですが、名作昔話絵本とか、名作絵本とか、名作」という文字の入っている本は、避けるほうがよいと思います。

成人式を終えた絵本

書店で良い絵本を選ぶ一つの目安として、成人式を終えた絵本」というのがあります。成人式を終えた絵本」というのは、その絵本が出版されてから二十年以上、読者に支

持されてきた、つまり子どもたちに喜ばれてきた絵本という意味です。それを見分ける方法は、絵本の中の最後の頁に必ず印刷されている、「奥付」を見ることがです。作者名、出版社名、出版社の住所などといったしよに、必ず何年何月何日初版発行と、書いてあります。初版発行」というのは、その絵本がはじめて世に出た日、つまり発行された日のことです。そして、この日付と並んで、何年何月何日何刷発行という字もあります。この何刷というのには、その本が今までに繰り返し印刷された回数のこと、その回数が多いということは、その本の人気が高いということを意味します。

決して絶対的な基準ではありませんが、二十年間発行し続けられた絵本というのは、まず信頼してよいと思います。欧米には、百年以上読み続けられている絵本さえかなりあります。たとえば『ピーターラビットのおはなし』は一九〇二年発行ですからおよそ百年も前の本。『二〇〇まんびきのねこ』は一九二九年、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』(P21)は一九三七年です。これらの絵本は、日本語に訳されてからでもすでに四十年はたっています。ちなみに日本の絵本では、『おおきなかぶ』『かばくん』(P19)は一九六二年、『ぐりとぐら』(P20)は一九六三年です。

想像力が育たないと読書はできません

四歳ころは、ことばに対する力がどんどん伸びるときですし、ことばを耳から聞いて、



『100まんびきのねこ』
ワンダ・ガアク 文・絵
いしい ももこ 訳



『ピーターラビットのおはなし』
ビアトリクス・ポター 作・絵
いしい ももこ 訳



『ティッチ』
パット・ハッチンス 作・絵
いしい ももこ 訳



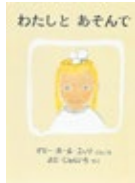
『こすずめのぼうけん』
ルース・エインズワース 作
石井 桃子 訳
堀内 誠一 画



『はじめてのおつかい』
筒井 頼子 作
林 明子 絵



『ももたろう』
松居 直文 作
赤羽 末吉 画



『わたしと あそんで』
マリー・ホール・
エッツ文・絵
よだじゅんいち 訳



『おふろだいすき』
松岡 享子 作
林 明子 絵



『ふるやのもり』
日本の昔話
瀬田 貞二 再話
田島 征三 絵



『いっすんぼうし』
いしい ももこ文
あきの ふく 絵

そのことばの世界——物語を頭の中に思い描くことができる力、つまり想像力や空想力といわれる力の基礎をしっかりと身につける時期です。

ことばというものは、元来、目に見えるものではありません。しかし字の読めない幼児でも「ももたるう」の話を手で聞くと、桃太郎とその仲間や鬼など、物語の世界が頭の中に見え、思い描けます。目の前には何も見えなくても、語られることばの力によって、自分の頭の中に、その物語の世界を思い描けるのです。その時、絵本のさし絵も大きな手助けをしてくれます。

目に見えないことばの世界を、自分で思い描き、目に見える世界にする力——想像力こそが、実は読書力なのです。この力が、幼児期に耳からしっかりと身につけていないと、文字を読む技術をどんなにたくみに身につけても、読書力は育ちません。

そして絵本が想像力をそだてます

幼児期は、自分で文字を読んで、しかもそのことばを頭の中で見える世界に置き換えることを同時にするのは、とても負担ですし容易ではありません。ところが、おとなに読んでもらって耳で聞き、ところどころさし絵を手がかりにして思い描くとすると、はるかに容易です。そしてこのやり方のほうが、想像する力をうんと伸ばします。絵本を読んでもやることは、読書力の土台である想像力を、のびのびと成長させることにつながります。耳からことばの世界へ自由自在に入り込み、物語の世界をありありと思い描くことのできる力を養う入口が、四歳児のころからです。

このように豊かな想像力をまず養っておいてからでないと、知識の本や科学絵本へと進んでも無意味です。

五歳・六歳児の絵本

夢中になれる一冊の絵本を見つけること

五歳、六歳児は四歳児の延長として、物語絵本のもっとも必要とされる時期です。そんなときでも、あまり先回りして、つぎつぎと絵本を与えようとしないてください。ときには、お気に入りの一冊の絵本を、何週間もはなさないことがありますが、これはとてもすばらしいことです。夢中になれるそういう絵本を発見できたことは、幼児期に人生の宝物をみつけたようなものです。読み手はたいへんでも、繰り返し読んであげてください。ときに、絵本の文章をすっかり覚えてしまいう子どももいますが、その子のことばの体験と発達にとって、それは最高のものになります。国語教育などでは、とても実現することのできないくらい、深いところで、ことばに対する力をしっかりと身につけているしるしです。



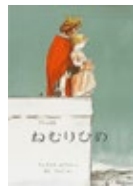
『かもさん おとわり』
ロバート・
マックスロスキー 文・絵
わたなべしげお 訳



『ラチとらいおん』
マレーク・ペロニカ 文・絵
とくなが やすもと 訳



『おやすみなさい
フランシス』
ラッセル・ホーバン 文
ガース・ウィリアムズ 絵
まつおか きようこ 訳



『ねむりひめ』
グリム童話 グリム 作
フェリクス・ホフマン 絵
せたていじ 訳



『スーホの白い馬』
モンゴル民話
大塚 勇三 再話
赤羽 末吉 画



『だいくとおにろく』
日本の昔話
松居 直 再話
赤羽 末吉 画



『もりのへなそうる』
わたなべしげお 作
やまわき ゆりこ 絵



『もいろのきりりん』
中川 李枝子 作
中川 宗弥 絵



『おしゃべりな
たまごやき』
寺村 輝夫 作
長 新太 画



『金のがちょうのほん
四つのもかしぼなし』
レスリー・ブルック 文・画
瀬田 貞二 訳
松瀬 七織 訳

たとえば、『しっぽのはたらき』『あなたはいえわたしはいえ』『わたし』『はなのあなの
はなし』にはつきりとみられる遊びの精神とユーモアが、子どもをこの本の世界で遊
ばせ、楽しませながら、好奇心を満たし、何かを心に残します。楽しみながら、考
えさせます。この楽しみがなければ、作者が語ろうとしたこと、伝えようとした知識や

科学の本も楽しさと遊びが大切です

子ども向けの科学絵本、知識の本も、基本的な考え方は物語絵本と変わりません。知
識を教えるとか、理科教育の準備になるとかといった、すぐ役に立つ、ためになる本だ
とせっかちに考えないでください。それよりも、まず子どもの好奇心や興味をどれほど
かきたて、楽しませるか、おもしろがらせるかが、これらの絵本の価値を決めるものだ
ということ、何よりも第一に考えてください。

科学の絵本、知識の絵本

文字が読めるようになると必ず自分で再び読むものです。一度読んでもらったなら、もう
自分で読まなくなるのではないかと思うのは、子どもの読書を知らないおとなの理屈で
す。楽しい絵本、おもしろい物語は、五年間ぐらい子どもとつきあうものです。同じ本
を繰り返し楽しむ——それが子どもの読書の特徴です。

六歳児には、長い物語(童話)を読んであげましょう
このころになりますと、かなり長い物語を、毎日少しずつ読んでもらおうことをとても
楽しみにします。『いやいやえん』『もいろのきりりん』『もりのへなそうる』『ロボット・
カミイ』『くしゃみくしゃみ 天のめぐみ』そして『エルマーのぼうけん』などの作品
をおすすめしたいと思います。

これらの童話の特徴は、耳から聞くのに、とてもふさわしいことばで語られていて、た
いへん朗読しやすく、とりわけ聞き手の子どもの想像力が精一杯ひきだされる優れた力が
あります。そのうえ、耳からこれらの作品の楽しさ、おもしろさを味わった子どもたちは、



『エルマーのぼうけん』
ルース・スタイルス・ガネット 作
わたなべしげお 訳
ルース・クリスマン・ガネット 絵



『くしゃみくしゃみ
天のめぐみ』
松岡 享子 作
寺島 龍一 画



『ロボット・カミイ』
ふるた たるひ 作
ほりうち せいいち 絵



『いやいやえん』
中川 李枝子 作
大村 百合子 絵



『はじめての
キャンプ』
林 明子 作・絵



『あおい目のこねこ』
エゴン・マチーセン 作・絵
せた ていじ 訳



『おおきな
おおきな おいも』
市村 久子 原案
赤羽 末吉 作・絵



『はじめてであうすうがくの絵本1～3』
安野 光雅 作



『あなたのいえわたしのいえ』
加古 里子 文・絵



『しっぽのはたらき』
川田 健文
数内 正幸 絵
今泉 吉典 監修

考えは子どもの心に残りません。子どもの心にくい込むには、楽しみと発見、驚きと疑問がなければなりません。

『たんぼぼ』をごらんください。たんぼぼの根はどうなっているでしょうか。これは写真絵本では表現できません。たんぼぼの花はほんとうは何百という花が寄り集まってできているのです。この事実を知ることはおとなですら驚きであり、大発見です。普段は目にうつらぬことが、絵本の中ではつきりと目に見えるように表現され、そこに驚きと発見があり、自然のいとなみの不思議さが感じられることは、とても楽しいことです。

遊びの精神が、幼い子たちを科学の世界へ導くのに、どれほど大きな力を持っているかは、『はじめてであうすうがくの絵本』をごらんください。きつとおわかりいただけよう。遊ぶことは考えることであり、創造性を発揮するのにとっても大切です。

子どものための科学の本は、教科書でも、参考書でもなく、絵本や童話と同じ意味で子どもの本なのです。子どもの心をゆり動かす本でなくてはなりません。

知識をどんなにたくさん蓄え、緻密に組み立てる技術を持ってても、そこから生まれるものが原子爆弾のようなものであってはならないのです。人間を、そして自然を大切に育てる科学の本を作りたいと考えますと、子どもの心が、いつも喜びを感じ、生き生きとしなやかに育つような科学絵本でなければなりません。それと同時に、科学的な考え方や事実を、正しく伝える美しい日本語の表現も、よく吟味しなければなりません。さし絵も正確で、しかも美しくなければ、子どもの心をゆり動かすことはできません。『みんなうんち』(P.18)『野の草花』『木の本』『赤ちゃんのはなし』『絵で見る日本の歴史』などはそれを目指しています。

『親子で楽しむ図鑑』

図鑑も子どもがとても喜ぶ本ですが、単なるものの羅列でなく、すでに説明してきたような考え方とまったく同じ立場で、人間の未来の問題を正しく見つけて作られねばならぬと考えています。その代表的な例が、加古里子の三部作『海』『地球』『宇宙』です。これらの図鑑は、特におとなと子どもがいっしょに楽しむことを意図しています。一冊の本を間にして、親と子が問題をぶつけあい、疑問を発見し、論議し、ともに考え、ともに驚き、楽しみを共有することは、子どものための科学の本の重要な目的の一つです。それでこそ、子どもの科学に対する興味を、親は共感をもって理解し、伸ばしてやることでできるのです。

日本の科学教育には、想像力が欠けていると鋭く指摘されたのは湯川秀樹博士です。技術者を養成するのではなく、本当の科学者を育てるのなら、幼いときから空想力をしっかりと育てることが大切だと説いた科学者もいます。子どものための科学の本も、



『みんなうんち』
五味 太郎 作



『たんぼぼ』
平山 和子 文・絵
北村 四郎 監修



『はなのあなのはなし』
やぎゆうげんいちろう 作



『わたし』
谷川 俊太郎 文
長 新太 絵



『海』
 『地球 その中をさぐる』
 『宇宙 そのひろがりを通して』
 加古 里子 文・絵

④ 絵本は読みっぱなしでよいのです。特に家庭では、絵本を読み終えた後、あれこれと質問をしたりして、無理にわからせようなどとは決してなさないでください。もちろん子どもの方から語りかけてきたり、質問をしたりした場合は喜んで話し合いたいです。一冊の本を読み終えたときの喜びや満足感を大切にすることが読書の楽しみです。

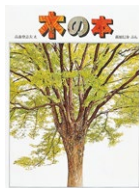
過保護と誤解しないでいただきたいのですが、日本には、古くから「手塩にかけて子どもを育てる」ということばがあります。この意味は、みずから手を下し、心を込めて、骨をおることだ」と辞書にのべられています。できるだけ手をはぶいて、楽をして、他人（保育者や教師）に教育をおまかせすることではありません。

どれほど幼稚園や保育園で、絵本を読んでもらっていても、家庭で、お父さんとお母さんが自分の声で読んであげなければ、教育の土台が失われてしまうのです。絵本は、わずか五分か十分で一冊読めます。いそがしいから、絵本を読んでやる暇がないのではなく、読んでやる気持ちがないからでしょう。子どものほうに心が向いていないからです。心を込めて絵本を読んであげてください。そのとき、子どもは、あなたのほうに心を一杯に開き、耳を傾けて、あなたのことばを聞くでしょう。自分に向いているあなたの愛情をいっぱい感ずるでしょう。それが親子ではありませんか。

株式会社 福音館書店
 〒164-0012 東京都中野区本町2-46-1
 中野坂上サンプライトツイン2階
<https://www.fukuinkan.co.jp/>



改定第1刷 2026.3
 表紙・中面・裏イラスト『ぐりとぐらのあいうえお』『ぐりとぐらの1・2・3』
 (共になかがわりえこ作 やまわき ゆりこ 絵)より
 ©Kakuta Nakagawa ©Kentaro Yamawaki



『木の本』
 萩原 信介 文
 高森 登志夫 絵



『野の草花』
 古矢 一穂 文
 高森 登志夫 絵

その本で、子どもがどれほど楽しみ、大きな喜びを味わったかによって価値が決まります。蓄積された知識の量では、人間性を計ることはできません。

おしまいに—— 私たちはこの子の親なのです

終りに、絵本と子どもについての考え方をまとめてみたいと思います。

① 幼児にとって、絵本は、役に立つ、ためになるといったものではなく、楽しむ、そのものだということ。一冊の絵本が、子どもに与える楽しみと喜びの大きさによって、その中味は深く心に残り、子どもを本好きにする原動力となります。

② 絵本は、子どもに読ませる本ではなく、おとなが子どもに読んであげる本です。親と子の絆が問題になっている現代の家庭で、家族ができるだけ夕食を共にすること、絵本を読んであげることが、子どもの成長に大きなよりどころを与えます。絵本は、親と子が心を開き、通いあわせる心の広場です。

③ 子どもが好きな絵本は、繰り返し読んであげること。それが読書への大切な入口です。読書は字を読むことでなく、一冊の本の中へ、夢中になって、我を忘れて入り込み、楽しむことです。この絵本体験がなければ、小学校低学年からはじまる本格的な読書への、順調な発展を望む親のほうが、身勝手というものです。



『絵で見る
 日本の歴史』
 西村 繁男 作



『赤ちゃんのはなし』
 マリー・ホル
 エッツ 文・絵
 坪井 郁美 訳



 福音館書店

<https://www.fukuinkan.co.jp/>